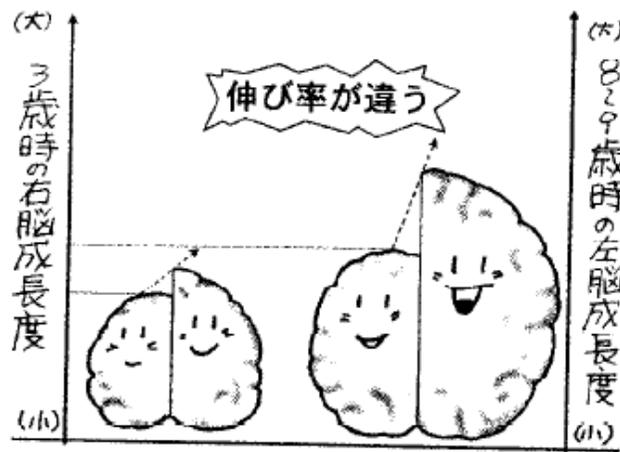


漢字学習で右脳を伸ばせば左脳もぐんと発達

幼児特有のすぐれた丸暗記能力、すなわち機械的記銘能力は、すでにお話したように九歳を過ぎた頃から少しずつ低下しはじめますが、それと入れ違いに、ちょうどこの頃から芽生えはじめるのが、左脳によって物事を論理的、分析的に理解し認識する力、すなわち「論理的記銘能力」です。わからないこともイメージとしてそのまま吸収してしまう幼児の側の働きから、私たち大人と同じように理屈でものを考える脳へと徐々に移行しはじめるわけです。

三歳を過ぎた頃から「なぜ?」「どうして?」という問いかけが急に多くなるのも、そのためなのです。

ところが、幼児期の機械的記銘能力(右脳の働き)には、ほとんど個人差がないのに対し、論理的記銘能力(左脳の働き)のほうは、同じ



年齢の子どもでも、その発達に大きな差が出てきます。そして、その差に深く関わっているのが、実は幼児期の機械的記銘能力の活かし方なのです。

右脳が伸びれば左脳はもっと伸びる

まだ幼児のうち、この機械的記銘能力を十分に刺激しておきます

と、左側の働きである論理的記銘能力も、早くから急激なカーブを描いて伸びていきます。そして、左脳の働きが目立って活発になる八、九歳前後になりますと、機械的記銘能力を十分に刺激しておいた子どもと、そうでなかった子どもの間には、その考える力、すなわち知能にもはっきりと差が出てくるというわけです。

特に、言葉というのは、直接的に考えたり理解する力を支えたりする道具です。ですから“見る言葉”である漢字で言葉を学ぶことは、幼児ならではの機械的記銘能力をもっと効果的に刺激して伸ばす方法であり、また、賢い子どもを育てるのに最適な方法でもあるのです。